

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第64号

● Contents ●

Topic: Lineage and Society in Contemporary China.	(SEGAWA Masahisa)	1
Northeast Asian Reports:		
Visiting to Archives for the Study of Modern History of Ethnic Frontiers in China.	(UENO Toshihiro)	2-3
Members' Forum: "Oh, Ukraine, I feel so sad!".	(MADONO Satoru)	4



現代中国社会と「宗族」

東北大学 東北アジア研究センター教授
(中国研究分野)
瀬川 昌久

私の主宰する東北アジア研究センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—『宗族』を通じた検証」では、中国の親族組織として知られる「宗族(そうぞく)」を主要な研究対象としています。中国では、同じ祖先に発する男系子孫たちのまとまりを宗族と呼びますが、地域によっては同じ村に居住したり祖先の祭りを共同で行ったりして団体化している場合も見られます。宗族は、文化人類学的な中国研究の成立当初から研究され続けてきた古典的な研究トピックのひとつですが、初期の人類学者たちはそこに中国社会の本質的要素を見ようとしていました。その後、文化大革命を頂点とする急進的な社会改革により中国本土では姿を消しましたが、1990年代以降の社会変化の中で、宗族は中国の東南部を中心に目覚ましい再生を遂げています。

今日、このように宗族の再生が見られるようになっていくことは、経済発展によってもたらされた富を威信に変換しようとする際に、宗族という形式が社会的正統性の生成において依然として主要な役割を果たしているからだと考えられます。また、それは古代中国からの系譜の連続性と中華民族の一体性を連想させるものであることから、伝統文化の喧伝やナショナリズムの喚起とも親和性が高く、各地の地方政府が追求する文化の資源化の動向とも結びつきやすい性格ももっています。

近代社会の支配的パラダイムは、親族関係を私的で社会的に局所的な関係であるとし、公共的な社会領域からは排除されるべきものとみなしてきました。その結果、人類学の内

部でも親族関係の研究は、人々のいわゆる「親密圏」へと退縮する歴史をたどってきました。しかし、現代中国における宗族再生の事例は、宗族が国家社会や地域社会の公共的領域と個人とをつなぐ重要な鎖としての役割を帯びる場合があることを示唆しています。つまり、日本や西洋をモデルとした現代社会観では、ともすると個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とされがちな親族関係が、それを超出する性格を有し得ることを示していると考えられます。

このように、少なくとも中国社会で宗族は社会的・歴史的な正統性の主張とリンクした存在であり、それゆえ私的個人間の人間関係の領域を超え、より広範な社会領域へと結びついてゆく潜在力を帯びた存在なのです。このような宗族のもつ私的な領域から公共的な領域への「浸出」現象を、初期の人類学者や社会学者たちは上述のパラダイムに則って中国社会の前近代性、後進性の証と考える傾向にありましたが、親族関係というものを私的で局限された「親密圏」とは切り離し、より柔軟な角度から今一度再考してゆく上で、中国の宗族という事例のもつ重要性は非常に大きいと考えられます。それは中国社会をその文化的深部から理解することに貢献するのみならず、われわれの中に暗黙知として存在している近現代の人間社会というものについての基礎イメージを、根底から問い直すことにもつながる作業なのです。

なお、本共同研究の成果は、平成27年度中に風響社より『宗族と中国社会の現在—古典的テーマからの新たな展望』として出版する予定です。



写真1. 祖先を祭る祠堂 (広東省佛山市)



写真2. 祠堂の内部 (広東省海豊県)



写真3. 祠堂内の位牌 (海南省儋州市)



写真4. 系譜を記録した族譜 (広東省肇慶市)

東北アジア通信

「中国边疆民族史研究の 一次史料を求めて — 所蔵機関訪問雑記」

東北大学 東北アジア研究センター准教授
(中国現代史・中国民族学)

上野 稔弘



歴史の研究は様々な史料を駆使するが、やはり文献資料がその中心となる。研究者にとってはより原初的な一次史料の収集が重要になってくるが、近現代史においては政府が保管し一定期間を経て公開している公文書が一次史料としての価値が高い。政治その他の分野における重要人物が所有・収集した個人文書も、一次史料としての価値が高く、こうした文献を保管・公開している公文書館などの機関を訪問し、閲覧・収集することが調査活動において重要となる。

筆者は中国近現代史における边疆民族問題の分析・解明を研究テーマとしている。中国では边疆民族問題は政治的に敏感な問題であり、関連史料の公開には慎重である。他方台湾では国共内戦末期に大陸から移送した民国政府文書の核心部分や蒋介石の個人文書コレクションについて1990年代以降一般公開が進み、当時の国民党政府や蒋介石の民族問題に対する政策決定を知る上での重要な資料が含まれているため、台湾の国史館(写真1)や中央研究院近代史研究所檔案館(写真2)での関連文献の閲覧・収集を進めている。さらにここ数年はイギリスの国立公文書館(写真3)や大英図書館を訪問し、チベットや新疆に設置されていた領事館からの報告およびそれに対する英国政府の反応に関する文書へのアクセスに着手している。アメリカにおいても国立公文書館(写真4)や議会図書館(写真5)を訪問し、中国边疆地域に関する外交文書やルーズヴェルト米大統領の派遣で蒋介石の顧問となったこともある著名なアジア研究者オーウェン・ラティモアの個人文書コレクションを閲覧する機会を持った。またスタンフォード大学内にあるフーヴァー研究所(写真6)では蒋介石が1920年代から晩年にかけてほぼ間断なく付けてきた日記を遺族の委託により公開しており、毎年閲覧に赴いている。日本国内では外務省外交史料館や防衛省防衛研究所戦史資料室では中国边疆地域に関する文書を所有しており、アジア歴史資料センターによるWeb公開分に未収録のものを直接訪問して閲覧して



写真1. 国史館(台北)

いる。現在はこうした文献調査を通じて様々な史料を蓄積し、また収集した史料の相互検証を進めている。

収集した史料はいずれも興味深いものであるが、紙

幅の都合もあるので別の機会に譲り、ここでは筆者が訪問した上述の諸機関の利用をめぐる体験を書き記すこととしたい。

入館・入室・閲覧手続きについては所在国・地域や施設の管理基準により様々である。日本や台湾の場合、毎回入館ないし入室の手続きが必要となるが、手続き自体は簡素である。基本的には建物入り口の守衛詰めで入館時間と退館時間をチェックし、入館者用の名札やバッジを付けて閲覧室に入る。台湾の国史館では入館時にパスポートを預け、また閲覧室でも入室・退室時間を記録するなど若干チェックが厳しい。他方英米では初回利用時に一年ないし数年有効の閲覧カードを作成し、以後はカードの提示で入館できるようになる。入館手続きブースのPC端末から必要情報を入力し、利用規約に同意の上、顔写真を撮ってカードが発行される。米国議会図書館ではWeb上でデータを事前入力すること



写真2. 中央研究院近代史研究所檔案館(台北)

で時間短縮を図っている。少々面倒なのは国籍・住所証明の提示が必要なことで、日本で住所の英文表記を公的に証明できるのは国際免許証くらいしか無いということである。大英図書館は日本人スタッフを擁しているため、幸いにも日本語の書類で証明できる。

また閲覧室への私物持ち込みは、所蔵物盗難防止のためどの機関でも神経を使う。英米ではノートPCのふたを開けて確認するほどの徹底ぶりである。米国ではこれに加えテロを警戒し入館時に金属探知機や鞆を全部空けてのチェックを行い、米国公文書館では電子機器類持ち込みの際はシリアル番号の登録と閲覧室出入り時の照合確認を行う。こうした点にも国情の違いを実感する。

史料の検索・閲覧申請についてはどの機関もWebによる目録検索システムの構築を進めており、台湾やイギリスの諸機関は整備が先行しており、渡航前にかなり綿密な閲覧計画を立てることができる。英国立公文書館は閲覧申請もオンライン化されており、閲覧室入り口付近のPC端末のカードリーダーで閲覧証を読み込ませ、座席指定と閲覧希望の文書番号を入力すると、随時受理され30分程度で座席番号の書類棚に文書が配架される。これと対極的なのが米

東北アジア通信

国立公文書館であり、Web目録の情報はやや簡素で、閲覧室脇の目録室で目録ファイルを見て詳細検索を行い閲覧申請書を作成し、アーキビストと呼ばれる専門職員のチェックと署名を得た後に窓口で申請する。目録室の混雑状況によってはチェックに手間取り、一日数回の申請締め切り時刻に間に合わず数時間を無為に過ごすことになる。また大英図書館や米国議会図書館では閲覧申請した文書が離れの書庫にあり、取り寄せに半日から一両日を要する場合もある。文献調査に際してはこうした各機関の事情を考慮して訪問スケジュールを立てる必要がある。

さて、こうした資料は基本的に紙媒体であるが、劣化への対応が重要な問題となっている。特に20世紀中葉の史料



写真3. 英国立公文書館（ロンドン）

では戦時下での物資窮乏や製紙方法に由来する劣化が急速に進み、非常に脆くなったり変色や退色で判別困難になったりしている。また台湾の民国期文書は移送の過程で傷みの進んだものも散見される。加えて閲覧利用者の増加は文書の汚損を進行させる。そのため各機関では複製物への代替による原本の保護を図っている。マイクロフィルムが代表的な方策であるが、モノクロゆえの判読しづらさなどの問題が伴う。それに代わるのが文書のデジタルデータ化であり、台湾では1990年代後半から国史館などが所蔵する公文書類からカラー画像データを作成し、目録検索システムとの連携を進めてPC 端末での閲覧を可能にしている。この方式は資料原本の保護だけでなく、複数の閲覧者が同時に一つの文書を閲覧できる点でもメリットがある。日本

のアジア資料センターは国立公文書館と外交史料館、防衛省防衛研究所の関連文書を順次Webで公開しているが、惜しむらくはマイクロフィルムの



写真4. 米国立公文書館II号館（ワシントンD.C.郊外）

モノクロ画像をそのまま使用しており、デジタルデータの優位性を十分に発揮していない。とはいえ、こうした文書史料のデジタル化の流れは一層進むと思われる。

閲覧に費やせる時間が限られ、また後でじっくり読み返したい文書がある場合、複写のし易さが重要になる。台

湾では上述のデジタル画像データであれば閲覧室内のモノクロプリンタで打ち出し可能である。ただし著作権法に基づき印刷できるのは全体の1/3



写真5. 米国議会図書館マディソン館（ワシントンD.C.）

以内である。また蒋介石文書については印刷不可であり、筆写ないしワープロでの書写に限られる。近代史研究所檔案館も同様の対応であるが、さらに一年間の印刷可能枚数に上限が設けられている。他方イギリスやアメリカの公文書館はデジタルカメラによる資料撮影が認められ、基本的に枚数の制限はない。ただし原本保護の面からフラッシュの使用は禁止であり、閲覧場所によっては光量不足で手ぶれやピンぼけによる撮影ミスリスクが高まる。これについて英国立公文書館では撮影用カメラスタンド備え付けの机を幾つか設置している。日本の外交史料館でもフラッシュOFFでのデジカメ撮影が認められるようになっている。資料収集を効率よく進められるという点で便利であるが、メモリの残量不足や電池切れへの備えが欠かせない。他方フーヴァー研究所では『蒋介石日記』をマイクロフィルムで撮影し印刷した形で公開しているが、写真撮影や電子複写はおろかワープロでの書写も不可であり、閲覧室備え付けの用紙に筆写するしかない。『蒋介石日記』は引用に際しても蔣家の同意を得る必要があるなどの制約があり、内容の複製・拡散にかなりの注意を払っている。

円安の進行により海外への渡航・滞在に要するコストが相対的に上昇する中、史料の閲覧・収集をより効率的に進める必要がますます高まっている。歴史研究者としては文書（とりわけ原本）を目前にすると、じっくり目を通したい気持ちに駆られるが、帰着後収集したデータを整理するときの楽しみとしてぐっと堪え、史料収集に使える時間を念頭により重要な史料をより効率的に収集することに神経を集中し、閲覧史料の選択や閲覧順序の調整、複写・撮影と書写の割振りをてきばきと進めてゆかねばならないのである。



写真6. スタンフォード大学フーヴァー研究所（パロアルト）

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。
 今回は、麗澤大学経済学研究科教授の真殿達先生に日本輸出入銀行のプロジェクトファイナンス部長時代から足繁く通われたウクライナでのご体験やご感想を分かりやすい文章で紹介していただきました。真殿先生はプロジェクトファイナンスや資源開発などをご専門としておられ、『国際ビジネスファイナンス』（麗澤大学出版会、2011）の監訳などの研究成果を持っておられます。

通いつめた国

麗澤大学 経済学研究科経済学部 教授 真殿 達



1996年11月以来ウクライナには何十回行ったことか。総合商社勤務でプロジェクトを受注したとか、研究者がライフワークでウクライナの何かを究めるといふことならよくある話だろうが、私はプロジェクトファイナンスを売り物にする銀行屋だったし、大学教師に転じたあとも教鞭をとったのは日本経済論やファイナンスで、ウクライナは程遠かった。それなのに、海外に出ることが少なくなった今も、出かけるならウクライナが多い。キエフに着くといつも、「帰って来た」という感覚に襲われる。いつ行っても美しい素晴らしい街だと思う。



写真1. キエフゲートにて山内NHK解説委員とともに

1996年から99年まで日本輸出入銀行でプロジェクトファイナンス部長なる肩書をいただきつつウクライナ輸出入銀行の再建を世界銀行から仰せつかり、兼職でそのチームのボスになっていた。それが始まりだった。

爾来、いろいろな人物にまみえた。ユーシェンコ（中銀総裁、その後首相から大統領）、ティモシェンコ（首相）、ヤヌコビッチ（首相から大統領）、ティフィクポ（大統領選3位）そして何人かのオリガルヒの総帥といった有名どころから銀行再建と一緒に奔走したエリート青年群、運転手や秘書を務めてくれたオジサンやオバサンたち、その係累の多数の庶民。もちろんウクライナの政治家やエリートたちに傲岸不遜を絵に描いたような態度で迫る国際金融機関の代表やスタッフにもいやというほどまみえた。

旧ソ連の銀行の再建は文字通り命を懸けるような経験を強いた。ウクライナのために死ぬるかどうかが試されているようなことが次々起り、切り抜ける都度、私を信頼し腹を割って物事を語ろうとする者、いわゆる仲間が増えていった。国際金融機関の局長や代表とウクライナ政府がまみえる時には、ウクライナに雇われた用心棒のような心境でウクライナを守ろうと必死だった。

仲間は高位高官ではなくキエフ大学国際関係学院卒の若いエリートたちだった。個人的な話にも関与するようになり、上から目線の表現ではあるが、できることは何でもしてあげよう、というような気持ちになって行った。多くの若者の家族の話や、来し方を教えてもらった。そんな折には、日本にはない過酷な風土と厳しい国際関係が生み出した旧ソ連の人間模様的一端を覗き見た気がした。

プロジェクトが終わるときに、ウクライナ政府は私に勲章をくれた。外国人がもらうことは珍しく日本人には初めての勲章だった。その後も仲間たちとの連絡は途絶えなかったし、心配もなくならなかった。私は機会を見ては訪れた。私が去る時IMFが奇跡と評するほど立ち直った銀行は、オレンジ革命によって誕生したユーシェンコ政権の情実人事が始まるとひとたまりもなかった。仲間たちは辞めていった。もちろん転身した世界で実力を思う存分発揮してみんな成功者になったが、ウクライナという国はどんどんダメになって行った。

ロシアを挑発し続けた挙句にクリミアを奪われたウクライナに心の中でつぶやいた。「お前がしっかりしないからロシアにクリミアを奪られたのではないか！」喧嘩して泣いて帰るわが子をしかる母親のような気持ちだった。泣いて帰るのがよその子なら、「まあひどい目に遭ったのね。可愛そうに、よしよし。」といったのかもしれない。



今号は、麗澤大学教授の真殿達先生から、深い絆をお持ちのウクライナでのお仕事について記事をいただきました。ロシアとの関わりでホットな話題となっている国です。また瀬川先生の「論点」は今復興しつつある中国の「宗族」の意義を論じ、上野先生からは歴史研究者の史料探求の苦労話です。充実した内容となったと思います。ありがとうございました。（岡 洋樹）

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第64号 2015年3月20日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター気付
 PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp